小平桂一氏ロングインタビュー 第2回：大学時代〜大学院時代

高　橋　慶太郎
〈熊本大学大学院先端科学研究部　〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉
e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

小平桂一氏インタビューの第2回です．東京大学に進学した小平氏は大学の授業や先生方に刺激を受けながらも，ボランティア活動や社会活動などに積極的に参加します．独立間もない当時の日本の大学や大学生はいったいどんな様子だったのでしょうか．また，小平氏は天文コースに進級し天文や物理の教育を受けます．学生が実習に使える観測装置は少なく天文の授業はそれほど面白くはなかったようですが，小平氏の天文学者を目指す気持ちは変わらず，不思議な縁で修士課程の後ドイツに留学することになります．

●東大入学

高橋：では大学時代の話に入ります．まずは受験ですが，東大を受けることは早くから決めていたわけですか？

小平：それはもう山本一清さんの言いつけみたいなものでですね（第1回参照），東京には東大しか天文学科がないって言うから．

高橋：受験はどうでしたか？

小平：大学の受験はですね，日比谷高校はまあ進学校だったけれど，前にお話した通りガリ勉はいなかったんです．ですけど夏休みに補習校とかやってるし，それから模擬試験なんか一生懸命受けに行ってるクラスメイトもいました．まあ今から考えると，当時はインターネットもないですしね，そういう受験とかの情報がそんなにないわけです．それに天文やりたい人ってのはそんなにたくさんはいないみたいだし，まあ成り行き任せみたいなことで考えていました．僕は日比谷高校の中での模擬試験みたいなので最初はずいぶんランクが下だったんですが，2回目3回目くらいからだんだんクラスで何番とか言えるくらいまでになって．

高橋：成績が上がってきたわけですね．どういう勉強をされてたんですか？

小平：僕がやってたのがですね，初めから100点は狙わないと．75点取ればだいたい通るはずだと．それでNHKがラジオで夜11時から受験講座っていうのをやってた．そこのテキストに出てる問題が毎月新しくなるんですけどね，それを全部解ければ本番で75点は取れるだろうっていうんで，一般の受験雑誌だとか問題集は一切やらなかったですね．そのNHKの受験講座のテキストだけやりました．それから文系科目は本を読みましたね．日本近代文学史だとか，それとか何々物語とかいう古典．古典も2冊くらい完全に読むとかっていうのを自分でスケジュールを立てて，それをずうっとやった．学校から帰って来ると1時間くらい寝て，それから夜の受験講座が12時に終わるまで勉強するっていうのをやって，それでまあ運よく1回で入れて…….

高橋：当時から東大は理I，理IIとかっていう分け方ですか？

小平：それはありましたね．理I，理IIは．

高橋：じゃあ小平先生は理Iに入って．

小平: はい，理Iで．

高橋: 大学に入って，まずは駒場の教養学部ですね．駒場の授業はどうでしたか？

小平: 駒場へ入って僕らの担任が，田村二郎っていう後に教養学部長をやったこともある数学の先生で，彼は代数が専門なのかな．最初の授業の時に先生が「君たち，僕の講義を聴くのならこの3冊を読んでおきなさい」とか言って，1番目が聖書だったんです．それで2番目がサミュエル・バトラーの『万人の道』かな．で，3番目がサマセット・モームの『人間の絆』．まあその頃はパソコンも何もない，書き写しですからね．先生がこう黒板に書くのを写して，みんなポカンとしてた（笑）．

そしたらうわーっとイプシロン，デルタ…と黒板いっぱいに代数の式が始まって，みんなもう一生懸命になってフォローしたんだけども，書き写すだけで何が何だか分かんない．それで授業が終わって先生が引き上げられちゃったら，みんな「何だ今のは？」って．「だれか行ってちょっと聞いてこい」とか言って3人くらいで行ったんだ，先生の研究室に．で，「講義をありがたく拝聴しましたけど，なかなか難しくてみんなフォローできません」って言ったら，「馬鹿者，旧制の学生だって俺の講義が分かったのは1クラスに何人かしかいない．お前ら新制で分かってたまるか.」って怒鳴り返されて戻って来た（笑）．そんな時代でしたね．

高橋: 小平先生もその中の1人だったんですか？

小平: そのうちの1人で行ったんですけどね．怒鳴り返されて．みんなそういう感じの先生でしたね．それだとか，岩堀長慶なんて数学の大家の先生なんかがマージャンがすごく強くてですね，土曜日だか金曜日になると，午後の授業でみんなに何かやらせてる間をずうっと歩きながら，「お前，今晩来るか？」って，自分のうちに誘うんですよ．それで夜にお邪魔すると雀卓か3卓くらいあって，奥さんがまた美人だってみんなが言って．そうするとね，1000点いくらだったか，明け方になってちゃんと学生からもお金を取るんです（笑）．

高橋: すごいですね，先生がマージャンに誘ってくるわけですか．今だったら問題になりそうな（笑）．

小平: それで12時におにぎりとみそ汁が出るんだけど，それもね，150円かなんか払わされた．他の先生にも「今日はみんなで飲もう」とか言われて駒場から道玄坂とか渋谷まで歩いていって，みんな先生がおごってくれると思ってると，適当な時間になって「有り金をみんな出せ！」とか言われて，やっぱりお金払わされたね．なんか豪傑な先生がいましたよね．

高橋: へー，今はそういう先生はちょっといなさそうですよね……（笑）．講義の方は何か面白い講義はありましたか？

小平: 萩原雄祐さんの講義っていうのが駒場であったんだけど，やってたのがなんか白色矮星の中の縮退物質の物理みたいな話で，萩原さんは「これはすごく面白い」って．こっちは全然分かる知識がないんだけど，なんかすごく面白そうなことなんだと思って（笑），聞いた覚えがありますけどね．

高橋: 萩原さんの講義を受けたわけですね．

小平: ええ，たぶん講義をされてた最後の頃だったと思います．ただ試験はもう決まってて，こっちに20くらい用語があって，こっちに20の人名が並んでて線でつなげるんです．だからエディントンとかね，こう線でつなぐわけですよ．だいたいもう前の学年の先輩から伝わってくるわけですから，そんなのは覚えとけばできると思って僕は試験をボイコットしたらね，先生に捕まって言われたんです（笑）．「俺の試験を受けなかった」って（笑）．

高橋: それは教養の天文の授業ってことですよね．

小平: 教養です．それから化学が面白そうだったけど，エントロピーだとかややこしくなってき

て，授業が面白くなくてさぼって図書館で勉強してたけれど，ついぞやっぱり自分で納得がいくまではなかなかいかなかったですね．

だけどそうですね，むしろ教養なんかで面白かったのは，そういう理系の話よりは人文社会系のね，哲学だとか倫理とか，ああいうのは面白かったですよね．その頃は新制になって僕らは3期目ですから，講義してる先生方っていうのは旧制一高（第一高等学校）で教鞭を取っておられた人とかで，まあなんだろうなあ，専門教育よりは人間教育っていうことに熱心だったんでしょうね．

あとはまあ夏は水泳で，もう6月から8月の終わり2ヶ月はどっぷり海岸に行っちゃってたしね，冬もまあ日比谷高校生のスキー合宿を支援する「雪陵会」という同好会を作ったりして12月の半ば初雪が降る頃から2月ごろまでは週末っていうとどっか滑りに行ったりなんかしてました（写真1）．そっちの思い出はたくさんあるけど，大学の方はあんまりねぇ……．

写真1　大学初年の頃，雪稜会スキーツアーで草津への途上の渋峠にて．左が小平氏．（小平氏より提供）

●セツルメントと学生運動

高橋： サークルとかは何かされてたんですか？

小平： サークルはね，初め剣道部に入ったんですよ．だけどね，ちゃんと練習しようとすると授業に出てらんないんですよ．授業時間にいろいろあるわけ．それでまあ血豆はできるし，それで剣道部は半年くらいでだめになって．それから後はね，新聞部に入った．ところが新聞部の中は，その後の学生運動につながるような共産党系だとか，まあ右翼はいなかったんですけど，やっぱりそういう政治色が結構強くてですね．入ったら途端にいろんな派から声がかかって，今晩の飲み会に出てこいとか．だからしばらく付き合ってたけど付き合いきれなくて……．

高橋： 新聞部の中にいろんな派閥があったんですか？

小平： まあだから新聞部の幹部の中に，看板を乗っ取ろうみたいなそういうのがあって，それでちょっとそっちは嫌気がさして．それからあとセツルメントっていうのがあって，ご存知かどうか知りませんけど，当時は社会運動の一環で，例えば法学部の学生が労働者地域に出かけていって，そこで労働者に対していろんな法律的な知識を与える労働活動とかっていうのがあったんです．

高橋： ああ，なんかそういうの聞いたことがあります．学生が農村とかに入っていくっていう．

小平： 僕なんかは法学的知識もないから，セツルメントで労働者地域に入って，労働者の子供たちに家庭教師っていうか，タダでいろいろ教えてあげる，なんか面倒見てやるっていうのに週に2, 3回行ってました．学校が終わって4時頃から行って，夜8時頃まで．掘っ立て小屋の中にまあ教室みたいな所があって，そこでやるんですけど僕は中学2年生を6人持ってたのかな．彼らが高等学校に入るまでずっと付き合って面倒見ました．だいたいその子供たちの家っていうのは親父さんが給料は呑んでしまって，家へ帰って来ると喧嘩ばかりしてるとかっていうね，そういう感じの家庭

が多いんですけどね.

それで8時頃までそのセツルメント活動をやった後に，総括があるんですね．その日に何をやったかっていうのを説明する．で，僕なんてやっぱり甘っちょろくて，子供たちがかわいそうだからっていうんでポケットマネーをはたいて何かしてあげたら，幹部からものすごく怒られたんですよね.「そんなお慈悲でやってるんじゃないぞ」って．でもそれは自分にはずいぶん勉強になりました.

僕なんかはそのセツルメントのヒラのメンバーだったんですけど，その幹部クラスっていうのはみんな思想的に社会主義に関係のある人たちで．まあ当時はまだ東西冷戦最中で，ソ連とかね，インターコミューンが強い頃で，まあ学生のインテレクチュアルな層としてはプロソヴィエトの人が結構いたわけですよ．僕もロシア語とかやりましたけども．で，僕はそれほどコミューン層にかぶれてたわけではありませんけれども，まあソーシャルな思考はあったものですから，困ってる人なんかを助けたいと．だからそういうセツルメントもやったし，それから肢体不自由児，ハンディキャップのある子供たちの面倒を見るエスペーロって会がありました．肢体不自由児は体は不自由なんですけど，海水に浸かると楽なんですよね．僕は泳ぎができたもんですからね，海浜キャンプとかそういうのを手伝いに行きましたね．だからセツルメントと肢体不自由児の会っていうその2つをやってたんです.

高橋： 結構活発に活動されてたんですね．大学生の頃はそういう社会問題とか政治問題とかにも興味があったと.

小平： ええ，ただ主義主張としてイデオロギーというほどのものではなかったですよね．それと当時は授業料値上げ反対だとか，それから自衛隊ができる時再軍備反対だとかね，デモがたくさんありましたけど，僕はなんかあんまりデモには行かなかった方で.

高橋： ああそうですか，学生運動にはそれほど参加せず.

小平： うん，ですけどあれは1959年かな．岸（信介）内閣が日米安保条約を更新するのに，もう単独でごり押しでやったことに対して，まあ日本のほとんどの学生がデモに行ったんです．その時は僕もデモに行って，国会に乱入してね（笑).

高橋： おお～（笑).

小平： それでずぶぬれになって警官に小脇抱えられて，日比谷公園まで連れて行かれて．警官だって学生とあんまり年は違わないんですよね．機動隊の人が「君は日本に革命がおこると思ってるんですか」なんて言うから，僕は「いえ，私は思っていません」なんて会話しながらずぶぬれになって日比谷公園まで行って，もうくつは脱げちゃってどっか行っちゃって，裸足で…….

高橋： 放水されたってことですか？

小平： そうそう，高圧放水でね．国会議事堂の構内に入ったけど連れ出されて，それでもうずぶぬれになってドロドロになって，明け方までかかって歩いて家まで帰ってきたりしましたけども.

高橋： お亡くなりになった方もいらっしゃいましたよね.

小平： 樺美智子さん．女子学生のね．あれはまあゲートの近くの雑踏の中で転んでですね．もう身動きとれないくらいですから，たぶん踏みつぶされて亡くなったんだと思いますけど．まあ政府が民意を十分質さずに，勝手に日米条約なり安保条約を更新したということに対して怒りを感じました.

僕は独立国としては自衛隊でも何でもいいけど，やっぱり自分の国を守る最小限の組織は持つべきで，それには国民がある意味じゃ犠牲を払わなくちゃいかん，そういうふうには思ってました．でも表立ってそういうのは言いませんでしたけどね．だいたい大学の授業が始まる前になると，聴講する学生が教室に入った頃を狙って，オルグが来るわけさ．オルガナイザー．オルグが来

て，一席ぶつわけですよね.「君たちどう思うんだ」とか言って,「手を上げてみよ」とかって.僕は前の方に座ってたから手を上げて意見を言ったら，あんまり他にそういう人はいなくて（笑).

高橋：僕が大学生の頃はそういうのはなかったですが，ビラを配っている人はいましたね.

小平：そういうまあ学生運動が華やかだった頃ですよね．だけど1969年の頃みたいに学園紛争に発展するような暴力はなかったですよね．言論の厳しさとの戦いでした.

高橋：ところで日本の独立の時に小平先生は中学生くらいでしょうか．その頃の思い出は何かありますか？

小平：ああ，講和してなんかそれですごく僕の生活圏で何かが変わったとかいう感じはあんまりないですね．1951年でしょ．あれからすぐに朝鮮戦争になりますよね．軍需景気で日本はすごく景気が良くなりました．でもなんか横須賀あたりに来ると，朝鮮戦争で負傷した兵士だとか，それから死骸がたくさん運ばれてて，それを縫い合わせる仕事があるとか聞きましたね．独立よりはそういう朝鮮戦争に関する記憶の方があります．日本が独立したっていうことの感慨とか，そういうのものはあんまりないですね.

高橋：それまで別に占領されてるっていう雰囲気はなかったですか？

小平：うーん，まあ立川にいた占領直後はアメリカ軍が町にたくさんいましたし，チョコレートももらったりして，そっちの方の印象があります．戦中は竹槍で「鬼畜米兵，殺せ」って言ってたのが，なんか実際に米兵が来てみたらチョコレートはくれるし，みんなジェントルマンって感じでしたからね．だから独立するまで日本が占領下にあったから圧迫されてたとかっていうのは少年時代には特に感じなかったですね．だから外国には一種の憧れみたいなものはありましたけど，独立したからどうっていう，そこは僕は残念ながらあんまり感じなかったですね.

●天文学科進学

高橋：3年生から天文学科に進学するわけですよね．それはやっぱり今の進振り（進学振り分け）みたいなもので？

小平：ええ，進振りがありました.

高橋：天文は人気があったんですか？

小平：いや，天文は入りやすいって，なんかそういう評判だったですよ（笑)．進振りの時にそれまでのなんだろう，通信簿っていうのがあるわけじゃないから…….

高橋：授業の点数の平均みたいな.

小平：ですよね，なんかそんなもので決まるんでしょうけれど，理系だったら物理とか化学は大変だけど，天文は楽だっていう噂があったりしたから，心配はしてなかったですね.

高橋：じゃあそれで天文へ行って，本郷に行くわけですね．同期は何人ですか？

小平：その時は7名いました．当時は天文コースっていうのがあったんですけれど，学生のグループとしてはみんな物理学科だったんです．物理学科の中の物理コース，地球物理コース，天文コースっていう3つがあったんです．だから物理の講義が主です．物理の講義は分からなかったけど面白かったですね．場の理論だとか，自分たちでもって自主ゼミをやったりしてましたし，なんかこう先端的なものに触れてるっていう感じがあったんです．でも天文の講義ってのは球面天文学の三角関数がやたらと出てくるような話だとか，それから摂動論でワーッてなんか展開してっていう．球面天文学っていうのは要するに測地学で使うとかそういうので，物理的な話というのはほとんどなくて．だから天文の講義はつまらなかったです.

それから天文コースは土曜日の午後に麻布に行って実習があったんですね．実習っていってもセキスタント（六分儀）で太陽の高度を測って，緯度だか経度だかなんかを決めるとかそういうの

ですけどね．太陽以外は観測できる道具がなかったです．それから三鷹では今でも奥の方にあるアインシュタイン塔って呼ばれてるね，こう垂直に光を下ろして横に分光器がある，あれは動いてたんです．それで太陽だけは観測できたんです．

高橋： 三鷹でも学生の実習をしていたんですか？

小平： 三鷹での実習は大学院になってからですけどね．だから土曜日は午前中の演習が終わって，物理の連中と一緒に大学の前から同じ都電で行くんですけど，物理の連中はみんなどっか銀座だとか浅草とかそっちの方に行くのに，我々だけは麻布まで行って午後実習って，全然面白くなかったですけど（笑）．

高橋： 当時，天文の先生はどういう方がいらっしゃったんですか？

小平： 天文はね，鏑木政岐さんとか，まあ本当に測地天文学の先生ですよね．駒場では萩原雄祐さんとか小尾信彌さんとかの講義もありましたけど，本郷に来てからは本郷にいた先生っていうのは藤田先生，藤田良雄さん．藤田さんから望遠鏡で撮った明るい星の低分散のスペクトルかなんかを，「これがスペクトルですよ」とか言って見せてもらったことがあります．藤田先生はその頃から低温度星のスペクトル分類をやられてて，そのスペクトルの話は講義でも聞きました．その後，辻隆さんやなんかがね，カーボンスターがどうだとかS型のレイトタイプがどうのとかっていうのを化学的にいろいろやられましたけど，藤田先生の頃まではまだタクソノミーというか，あるスペクトルに対して名前を付けて分類していくようなね．そういう話でしたから，僕にしてみれば天文学としては新しいことではあるけれども，教科書に書いてあること以上でもなかったような気がするんですね．それはやっぱり日本に観測装置がなかったからで．

高橋： 畑中（武夫）さんはいらっしゃいましたか？

小平： 畑中さんはいたけどね，学術会議だとかいろんなところでもう忙しかったのかな．畑中さんはねぇ，覚えてるのは僕が大学院生の時ですけど，当時は天文学会といっても所帯が小さくて，ワンセッションだったですよね．パラレルじゃなくて．みんな模造紙に書いたやつを吊るして学会発表するような時代ですから．で，東京にいる天文の先生方が集まってやるようなワークショップだか研究会みたいなのがあった時に，麻布の教室でやってたんですけど，当然麻布に出入りしている大学院生なんかもみんな参加したんです．そしたらなんかその研究会のまとめを畑中先生がやっておられて，なんとかかんとかこれについてみんな意見はどうだって聞いてる時に，僕なんか大学院生でチンピラなのに「君はどう思う」なんて聞かれたんですね．それで僕はこの先生はちょっと変わってるというかね，学問では年を食ってるとか若いとか関係なしにいろんな人の意見を聴くんだっていうのが，僕の畑中先生に対する最初の印象でしたね．

高橋： 畑中さんは講義はされてなかったんですか？

小平： 畑中先生の講義は確か星の内部構造とかやっておられたと思うんですけど，たいがいはまあ欧米の学者が書いた教科書の焼き直しみたいなもんで，まあそういう分野もあるかっていう感じでした．今だったら数値積分をずっとやればいいようなものを，どうやって理論式で近似するかみたいなね，近似をどうやれば一番うまくいくかみたいな話ですから，本質的な面白さじゃないんですね．

高橋： では天文の授業はあまり面白くなかったと．

小平： だからもう3年4年になってからはもう面白いことはあまりなかったですよね．ただ，荒木駿馬さんの宇宙論の本[1]とかはかじりましたし，宮本正太郎さんが書いた『天文学概論』[2]っていう割合薄っぺらいんだけど理論が書いてあるのがあってですね，それは本気で勉強しました．

高橋： 京都大学の先生方ですよね．

小平: 京大は宇宙物理と称してて，天文とは言わなかったですね．そういう物理的に書いた天文の教科書は読みよかったというかね，理解しやすかったんです．それは僕1冊読んだ覚えがありますけど，他に特に天文の本を読んだということはなかったですね．

高橋: 卒論みたいなのはあったんですか？

小平: 卒論はなかったですねえ．要するに卒論ていわれた覚えはなくって，なんか1つだけレポートを出されたのは，太陽が沈んでいくと大気差の影響でひしゃげて見えますよね．それを計算しろとかいうのはありましたけどね．

●大学院

小平: それで僕らの学年は7人でしたけど，結局天文で大学院に行ったのは，僕ともう1人，林（正男）っていう2人だけだったんです．それから物理に移った人も2人くらいいますね．それから高等学校の先生になった人もいるし．やっぱりあんなに講義がつまらなければねえ．

高橋: 小平先生は修士はそのまま東大に行ったんですね？

小平: 修士は東大ですね．学部に4年いたけど天文学をやってるって感じでもなかったんで，4年の大学院入試の時も，まあどうしてもっていう感じでもなかったですよね．その頃はもう大学で天文に入ったものだから，昔のアマチュア少年だった時みたいな三鷹の天文台の人とかとの付き合いも却って少なくなってました．でも天文自体は面白いとは思ってましたよ．この宇宙がどうなってるかということはね．でも大学の専門として，物理だとか他に比べて天文学が非常に面白いとか，どうしても大学院に行きたいという気はなかったです．それで僕の指導教官というわけでもないけど面倒見ててくれたのが海野和三郎さんね．海野さんは割合自由で，まあ学生が何やろうが構わないってことでまあ天文に来なさいよって感じはありましたけど．それからどうでしょうねえ，まあ

写真2　大学4年の頃，全日本泳法大会表彰式にて．小平氏（所属一水会）は全国第二位に入賞した．（小平氏より提供）

大学院に進むとそのまま夏は後輩の指導で水泳ができる．夏に2ヶ月くらい千葉県の海岸に詰めてやってたんですけど，医学部に行った人は長くいれるんですよ．そうでない人はもう4年で就職したりしちゃうんでね．大学院に行けばもうちょっとしばらく自分の好きなことがしてられるっていう，それはありましたね（写真2）．

高橋: 天文学者になろうっていうのは，ずっと変わらずにあったんですか？

小平: うーん，他になりようがないみたいな感じだったかもしれませんが．

高橋: 子供の頃からの夢で．

小平: まあだから子供の頃って人に聞かれると何か答えなくちゃいけないからそう答えてたのが，逆に何度も答えていたことで自分の答えになってきちゃってるみたいなこともあると思うんですよね．

それからね，言い忘れたけど高等学校の頃，1950年代だと思うけど，アメリカのパロマー天文台が動き出したんです．あれがほとんどできあがったのは戦前なんだけど，戦争で止まっていて完成したのは戦後なんですよね．で，戦後になってパロマー写真集ってのが出たんですね．その頃は占領軍が外国の文物の日本語出版をコントロールしてたんですけど，アメリカの国威発揚ということもあったんでしょう．割合早いうちにそのパロマー写真集っていうのが出て，それにアンドロメダ銀河のきれいな写真が載っててですね．それ

を見て，単純に美的な対象としてなんか素晴らしい神秘なものだなって感じたのが高校2年くらいだと思うんです．それが結構先々天文をやろうっていう思考をずうっと引っ張ってきたんです．

高橋： パロマーのアンドロメダ銀河を見て．

小平： だからまあ天文の先生方の中で，物理とか数学が非常にできる方で，宇宙に行くと雑物がないから，あるいは極限的な環境があるから物理学や数学が面白くできるっていうことで天文学をやってるという先生もいると思います．だけど僕の場合はそれよりはやっぱり子供の頃の星空の不思議さとかね，きれいさとか，それからまあこの我々人類を包んでるまわりっていったいどうなってるんだろうっていう興味で天文でしたね．講義が面白くなくてもそういう気持ちはずうっと続いていったんですね．

高橋： 自分できれいな天体を観測したりとかはしてたんですか？

小平： 高校に入るくらいまでは8 cmの望遠鏡で太陽の黒点とかを観測してましたけど，後はさっき言ったように大学の麻布での実習っていっても夜のは少なくて，もっぱらセキスタントで太陽の位置を測定したり時刻を決めたりそういうようなあれでしたから．三鷹の太陽望遠鏡で太陽だけは観測できる．ですから太陽物理っていうのは，日本では京大でもやってましたし太陽観測所も動き出してましたし，乗鞍も当時始まってました．

高橋： 修論ではどういうことをされたんですか？

小平： 修士論文は海野先生が，「こういうのやったらどうだ」とか言って，黒点は黒いんですけどその周りにブライトリングって他の所より明るいリングができるんですね．それがどういう構造になってるかっていうのをセンター・リム・バリエーション（中央・周縁減光効果）から，その深さによって温度がどうなってるかっていうのを見るわけです．それを普通の光球面と黒点とブライトリングと，3つを比べることで垂直方向の温度の違いみたいなのを見るっていうテーマでやったんです．

高橋： 太陽の研究をしたわけですね．

小平： 実はその前にもやってたことがあったんです．海野さんがちょうど磁場の中の輻射輸送を理論的に解いたのを実際に装置として実現して，黒点の磁場を測定するっていうプロジェクトがあったんです．それは科学研究費かなんか海野さんがもらったのをちょっともらって，方解石を使ってそういう装置を作ってたんだけど，観測するまでにはできなくて．結局それは後にドイツから帰って来てやった最初の仕事になって，その時のものを続けてやりましたけどね．だから大学院生の時は観測らしい観測はやってないですね．

高橋： 海野さんの太陽の磁場と偏光の研究はすごく有名ですよね．

小平： ストークスパラメータを使って理論的に解いたのは有名ですよね [3].

高橋： それを検証しようということだったんですね．海野さんの論文はそんなに早い時期だったんですか？

小平： ですから，僕が大学院生だったのが1959年ですから，入った頃にもう海野さんの論文は出てたと思いますね．で，なかなかストークスパラメータ自身を星についてちゃんと測定するっていうのは難しくて，僕がそれをやったのはドイツから帰ってきてカルテクに行く直前でしたから1966, 7年の頃で，その方解石を使った小さな装置を岡山の188 cmのクーデ焦点につけてやったんです．今は大望遠鏡を使えるようになったから，星の磁場を測定しようとかっていう試みはいろいろありますね．

高橋： 岡山の188 cm望遠鏡ができたのも小平先生が大学院生の頃ですか？

小平： 修士が終わってドイツに出かけた頃に岡山の188 cmができあがったんだと思うんです．だけど，そんなことは大学院生で全然知らなくて，そういう岡山の望遠鏡が建設中だってことも全然情報がなかったです．

高橋: 当時の大学院っていうか，天文教室はどんな様子だったんですか？

小平: うーん，そうですねえ，まあ星がなぜ光ってるかの核反応の話とかね，そういうのは当時盛んに議論されたところでした．それから「新着の雑誌が来たのでみんなで今日の午後読みます」なんて，まあ船便で2ヶ月くらいかかってアメリカから送られてきたようなAstronomical Journalとかそういうのをみんなに紹介するっていう感じだったですね．

高橋: 東京天文台の先生とは関わりがあったんですか？

小平: それはあんまりなかったですね．当時はねえ，東京天文台っていうのは東大の付属研究所だった．研究所とそれから教育をやってる本体である学部とを比べると，学部の先生は学者で，研究所のまあ一応教授といってる人たちは研究者っていうかね，専門のことはやってるけれどやっぱり学者ではないっていうような感覚があって．その後ドイツから帰って来てしばらく天文台に就職したんですけど，本郷に対する三鷹の，なんていうかな，お互いのそりが合わないというか，そういうところは感じましたね．

高橋: 本郷の学部の方が上っていうことですか？

小平: そうです．東大の先生っていう感じで．研究所の先生はまあ研究者，研究好きな先生っていう感じはありました．大学の付属，付置研究所っていう位置づけから来るんでしょうけど，本当にレベルが違っていたかというのはちょっと分かりません．それとたぶんねえ，戦争中なんかは付置研の先生方っていうのは結構軍に借り出されて，ノクトビジョン（暗視装置）を作るだとか，赤外線探知をやるだとか，それからまあ前線の位置を決める観測をやるとかね．そういうのをいろいろやっておられた技術将校っていうのか，そういう役割をされた方が多いんじゃないでしょうかね．

高橋: ああ，たぶん歴史的にというか戦争でどういう役割を担ったかというのも違っていたんでしょうね．ところでさっきの国会でのデモの話は60年安保の前ですから，院生の頃なんですか？

小平: そのデモに行ったのは院生だったかな．1959年ですからね，修士1年だった．みんな教室に集まって天文学科として学生が出るっていうので，さすがにその時は藤田先生初め教室の先生たちも集会に顔を出したけど，留めはしなかったですよね．後からたぶん別行動でしたけど，先生たちもついてきて，学生たちがけがをしたりしないかどうか遠くから見守ってた．まあ結局あれで岸内閣の総辞職まで行ったわけですけど．

高橋: 天文学科としてっていう感じだったんですね．大学院の同級生は1人しかいなかったということでしたけど，先輩後輩はどんな方がいらっしゃったんですか？

小平: 先輩はですね，僕らの1年上が内田（豊）さん，加藤（正二）さん．内田さんは電磁流体っていうかね，スパイラル磁場の研究なんかやられてましたけども，元々は太陽をやってましたね．その1つ上が甲斐（敬造）さんとか，太陽をやってる人が多かったですね．下は1年下が成相（恭二）君とか．僕はドイツに行っちゃったんで日本の縦のつながりってあまり強くなくてですね．

●ドイツへ

高橋: それで，修士が終わってドイツに留学するわけですね？　これはどういうきっかけなんですか？

小平: そうですね．1つは日本にいてもあんまりしょうがないと思ったのと，それから家庭の事情で．親父が会社で重役をやってたんですが，当時はまだ労働環境が良くなくて化学工場で労働災害っていうかね，病気になる人が出てたんです．それで労働組合も盛んになった頃で裁判沙汰になって．親父は重役だったくせに，なんか理屈としてやっぱり労働組合の方が正しいと，もっと労働災害をちゃんとしなくちゃいかんって裁判で証言したもんだから，重役を首になっちゃってね．

高橋: 労働者の立場に立ってということなんです

ね．

小平：で，首になったらまあ家計が破綻しちゃいましてね．僕は国の奨学金をもらっていたんですけど，1週間に8人の家庭教師をやったりして，それでもう日本にいてもしょうがないと思って．

それでこれは高校生の話に戻るんですけど，普通の入試勉強はしたくなかったんで，英語をうまくなるためには英語の文通をしたらどうかと思ってですね．その頃はまだ戦後の名残で『ペンパル』って雑誌があったんですよ．今どうか知らないですけど．そこへ住所を登録しといて，英語で文通したいと．そうすると外国でそういうのをサーキュレイトして住所を送ってくれてですね，文通ができるっていうのがあったんです．それで僕も英語で文通をしたいっていうのを出しておいたら，当然イギリスかカナダかアメリカから返事が来ると思ったら，来たのはドイツだったんです．それがしかも女の子で，20歳ちょっとだったかもしれないけど，同じくらいの年の女の子で．その子がハンブルク大学の哲学科にいてですね，西田哲学をやりたいんで日本に来たいと．

高橋：西田哲学というと西田幾多郎ですか？

小平：はい．で，お前の所にホームステイさせてくれるかってね．その時は親父もお袋もまだ羽振りがちょっと良かったんで，まあうちの妹と同じようにね，娘の1人って感じで来てもいいよっていうんで来たんですよ．来たんだけどやっぱりね，向こうはドイツの娘ですから，着いた晩の夕食の後「ビールが飲みたい」とか言い出したら親父が怒って（笑）．それで僕がドイツに行くまでその子がずっと日本にいたんです．

高橋：そうなんですか．日本に哲学の勉強をしに来たということなんですね．

小平：うん．で，その子に「何だったらドイツの大学に行ってみたら」ってことを言われてですね．それでその子の実家っていうのがウンゼルト（Albrecht Otto Johannes Unsöld）っていう大先生がいたキール大学のすぐそばだったんですよ．

高橋：ウンゼルトは後に指導教官になる先生ですよね？

小平：そうです．「ドイツの政府留学生の試験を受けてみたら」って．それでドイツ政府の留学試験を受けたんです．受ける時のコツとかをその子が教えてくれたんですよね．ともかくドイツ語の試験があるけれども，「ああ，それは答えるのがすごく難しい」っていうドイツ語だけ覚えておいて，何か聞かれたら思慮深くそれを言えばいいとかさ（笑）．それからドイツの国立大学は当時17しかなかったんですけど，絶対ドイツの大学についての話が出るから，その話を勉強していってそれらしいディクテーションが出たら，ともかく何でもいいからそれを書いちゃえとかさ．いろいろ教えてくれて，でまあその試験に通ったんですよ．で，何かあったらその子の実家に転がり込めるようにっていうんで，一番近いキール大学っていうのを選んだんです．

確か推薦状は藤田良雄先生が書いてくださったんですけど，まあその世界有数のウンゼルト先生が引き受けてくれるっていう返事が来たんです．僕は初めそんなに偉い先生とは知らないで，海野さんに「ウンゼルト先生っていうのが引き受けてくれた」って言ったら，「えー，ウンゼルトが引き受けてくれるの？」って驚いて．よく見てみると天文教室で輪講に使っていた本がウンゼルト先生の教科書[4]で（笑）．それで図書室に置いてある外国の英語の教科書っていうのはだいたい海賊版なんですよね．ライセンスなしでコピーしたような．で，うっかりウンゼルトの教科書の海賊版を持ってドイツに行ったらウンゼルト先生に見つかっちゃって，「著者割引で私のを買いなさい」って言われたんです（笑）．だからそこは全くねえ，半分偶然みたいなもので…．

高橋：じゃあウンゼルト先生を知ってて選んだわけではなくて．

小平：なくて，こういう分野でこういう人っていうと，向こうの学術交流会の方で引き受け手を探

してくれて，ですからまあそういういろんなファクターが重なってドイツに行くことになったんですよね．まあ修士を終わる頃は経済的に見ても，それから学問内容から見てもね，このまま東大の博士課程に進んでもっていう感じがあったんです．でもまだ外国に出るのに外貨が持ち出せない時代ですから，1ドル360円で自由に持ち出せるのは5万円くらいまでだったですよね．それで奨学金が取れるということになって．

高橋： 奨学金は向こうで暮らせるくらいの？

小平： 奨学金は最初1年って言ったんですけど，場合によってはもう少し長くなるかもしれないと思って，1年目にもらった奨学金の半分は貯金したんですよね．ドイツに行ってからの話はまた後でしますけど，僕がドイツに行ったらウンゼルト先生がまあ僕を見込んでくれて．というのも最初にちょっとこういろいろテスト的なフェイズがあったんですけど，そこでいい評価をしてくださったんです．それで2年目も3年目もウンゼルト先生が申請して，奨学金を延ばしてくださって，結局3年半いたんです．3年で学位を取って，あと半年はポスドクでいさせてくれましたね．それは全く運が良かったっていうか，時代の背景もあると思うんですけどね．

高橋： そうなんですか．でもドイツに行くっていうきっかけは，その文通の女の子だったわけですね．すごいですね．

小平： 文通の子で．それまでも僕はドイツを別に嫌いではなかったですけどね．世界哲学全集とかそういうのを読むとドイツの思想家が出てきますし，ゲーテだとかああいうのは作品として好きだったりしましたから，ドイツに対するある種の憧れみたいなものは前からあって．高等学校の課外授業でもドイツ語をちょっとかじってました．ロシア語もやってましたけどね．だからそれで文通があって，もしその時もらったアドレスがアメリカだったりカナダだったりオーストラリアだったら，そっちに行っちゃって，ドイツとの縁はそこで切れてたと思うんです．それでうちへ来た女の子の家が，ウンゼルト大先生がいるそばだったということもあってですね．まあ希望を書いた時に，地域くらいは書いたかもしれません，北ドイツだとかね．

高橋： 不思議な縁なんですね．では留学の詳しいお話を次回にお願いします．

（第3回に続く）

謝辞：本活動は天文学振興財団からの助成を受けています．

参考文献

[1] 荒木駿馬, 1954, 天文宇宙物理学総論11 星雲宇宙（宇宙物理学研究会）
[2] 宮本正太郎, 1956, 天文学概論（朝倉書房）
[3] Unno, W., 1956, PASJ, 8, 108
[4] Unsöld, A., 1938, Physik der Sternatmosphaere（Springer）

A Long Interview with Prof. Keiichi Kodaira [2]

Keitaro Takahashi
Faculty of Advanced Science and Technology, Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami, Chuo-ku, Kumamoto, Kumamoto 860-8555, Japan

Abstract: This is the second article of the series of a long interview with Prof. Keiichi Kodaira. After entering the University of Tokyo, he actively participated in volunteer activities and social activities while being inspired by university classes and professors. What were Japanese universities and students like at the time just after the independence? Then, he proceeded to the astronomy course and received astronomy and physics education. The astronomy classes, with only a few observation facilities that students could use for training, were not so interesting to him, but his desire to become an astronomer did not change, and he decided to study in Germany after the master course.